
令和2年度 第2回

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

令和2年2月2日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図^{あいず}があるまで、この冊子^{きつし}の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生^{くしけんせい}どうしの貸し借り^{かひかり}もできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. けいたい電話は、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子^{きつし}の印刷^{いんさつ}が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子^{きつし}のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は18ページまであります。
8. 問題冊子^{きつし}は持ち帰ってください。

一

次の各文の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

- ① 一度にいろんな話を聞いて頭が**コンラン**した。
- ② 時間の**セイヤク**があるので次の質問にうつります。
- ③ 地震に強い**コウゾウ**のビル。
- ④ **キョウリ**から父が上京する。
- ⑤ 口で言うだけなら**カンタン**だ。
- ⑥ 外出の**キョカ**がおりる。
- ⑦ 国の**サイセイ**が苦しくなる。
- ⑧ 学級会で司会を**ツト**める。
- ⑨ 失敗の巻き返しを**画策**する。
- ⑩ 印刷より**直筆**の年賀状のほうがよい。

□ ② 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

一万年あまり前、人間の前に、**①**大きな悲劇がせまってきました。運命が、はじめて、人類に対して、冷たく背をむけたのです。

原因は、地球の気候の変化です。多くの地方で、温度がどんどんあがりはじめました。氷河は、後退していきます。気候の変化は、植物に大きな影響をあたえました。植物を食べて暮らしている動物たちも、当然、大きな影響をうけます。

その頃、地球上には、約百万人の人間が暮らしていたろう、と推定する学者がいます。今日の地球上の人口からみれば、五千分の一という数です。

しかし、彼らは、有能な狩人でした。肉食を主にする生きものとしては、すでにその数は、他の肉食獣に比べ、異常なほどに多くなりつつありました。

彼らの有能さの秘密は、石槍や石斧、棍棒などを使い、集団で行動することでした。寒い草原にすむ大形の草食獣、マンモスやトナカイに対して、とくにその戦法が有効だったのです。しかし、**(注1)**狩猟の方法が発達するにつれて、マンモスたちは人間に圧迫されていきます。そこに気候の変化が加われば、大形獣はどんどん姿を消していくのです。人間の狩猟法はますます有効になっていくのに、頼りにしていた獲物が、いなくなってしまうました。

多くの人が飢え死にしました。それでも、人類は滅びませんでした。マンモスのように地球上から消滅してしまう前に、新たな生きる道を見出していったのです。

人間という生きものが、その内に秘めている **(注2)**多様性、それが、人間を救いました。

自分をとりまく状態が変われば、それに応じて自分も変わることができる。いわば、何でも屋の人間のしぶとさです。

草原のあとに森林ができた地方では、人間は小動物をつかまえる狩人にならなくなって、生きのびました。

小動物たちは、素早く逃げてしまうので、今までのような狩りの道具では役に立ちません。また、大勢でかかってつかまえ

ても、食べる量はごくわずかしかなりません。バラバラに別れた人々は、弓矢を巧みに使えるようになっていきました。弓矢の発達は、空とぶ鳥や、水の中にすむ魚を、人間の重要なメニューとしました。

いたるところに、氷河から融け出した川や水たまりができました。北極や南極の氷の一部も融け、海の水位もあがりました。海から食べものをとる暮らしをはじめた人たちは、同じ場所で長く生活するようにもなつたでしょう。日本の縄文文化では、貝をとるために、木の枝を干潟にうえたり、小石を海岸にばらまいたりしたことが発見されています。今日の養殖のような方法が、すでに考えられていたのです。

多様な新しい暮らし方のなかでも、とくに大切なのは、植物を食べる、という生き方でした。のちになって、人間の生活に大きな革命をひき起こす芽が、そのなかで育つていったからです。

もともと、人間は、肉を食べるあいまに、食べやすい木の実、果実をつまんでいた、と思われます。しかし、肉がなかなか手に入りにくくなり、植物に頼つて生きていくというのは、さぞかし大変なことだったにちがいありません。

葉を食べて栄養とするのは、人間の身体にとつて無理でした。木の実や、木の根っこには、しばしば毒がありました。草の実、種は、かたい殻におおわれていて、そのままでは食べても消化しません。

私は、アフリカの奥地で、固くなったトウモロコシの粒を、二つの石を使って粉にして食べている人々の暮らしを見ました。そのままではダメなものを、粉に変えて食べる。これも大変な知恵です。それにしても、^(注3) 挽臼を知らない人々の労働のなんと辛いことか。一食分のトウモロコシを粉にするのに、女性は一日の半分近くを使つていました。

^④ 当時の人々の遺体の多くは、やせていました。マンモスがいた頃の人々の遺体に、栄養の取りすぎのあとがのこつているのとは、まさに正反対です。また、草の種にふくまれている糖分のせいでしょう。虫歯がふえてきました。

きびしい生活のなかで、人間の内に秘めた研究心が活動しはじめます。かつて、マンモスの行動を観察し、その弱点をついて成功した人間が、今度は、食べられる植物に、鋭い目をむけていきます。

人類が、はじめて農業という新しい生活方法をあみ出した西アジア、いわゆる^(注4)オリエントには、ムギが野生していました。アジアの山岳地帯^{さんかく}では、イネの祖先が、野生していました。そのほか、中国のアワ、アメリカ大陸のイモやトウモロコシなど、まとまって収穫^{しゅうかく}することができ、栄養が豊富な野生の植物に、当時の人間は注目していったのです。

それにしても、野生に実っている植物を収穫して食べることで、自分で種をまいて植物が育つまで待ち、それをとりいれて食べることのあいだには、じつに大きなひらきがあります。

「南米にすむアリの仲間には、なかなか辛抱^{しんぼう}づよいやり方で、食べものを育てるものがあります。彼らはまず大集団で、木のぼり葉を切りおとし、自分の巣に運びます。これは、自分の食べものではないのです。巣^さのなかで栽培^{さいばい}しているキノコのための、いわば肥料なのです。そして、キノコが、アリの食べものになるのです。生物の広い知恵の中には、こんな仕組みも含まれてはいるのです。

それにしても、自然の恵み^{めぐみ}をそのままに受けることになれていた人間が、どうして、自分で種を播^まくことを覚えたのでしょうか。ここにも大きな謎^{なぞ}があります。

ある人は、お墓に、ヒントがかくされていると考えました。死んだ人も、じつは別の世界に生きているのではないかと、という考えは、ごく最近まで各地に残っていました。彼らのために墓^{いっしょ}に埋^うめた種から、春になると芽が出て育つのを見たことが、植物栽培を人間に思いつかせた、のではないかというわけです。

有名な少年少女文学に『ピノキオ』があります。主人公の人形ピノキオが、金貨を木の下に埋めて、増えるのを待っているエピソードに笑った方も多いいのではないのでしょうか。同じようなことが、たとえば、初めて鉄を知った太平洋の島々の人々に起こった。ある首長が、釘^{くぎ}を埋めて、芽の出るのを待った、という報告を、当時の航海者が伝えていきます。よく考えてみれば、現代の私たちでさえ、どのくらい確実に、植物だけが、土の中に埋^うめると芽を出す理由を知っているのでしょうか。

狩^かりの名人であった古代人たちは、動物をよく観察していました。幼い子どもが、だんだん成長していくのに、時間のかか

ることも、十分に理解していたはずで。

それにしても、種を、土の中に埋めてしまうには、^⑤相当な思いきりが必要だったでしょう。動物の子どもは、目の前で大きくなるのですが、植物は、見えない土の中で生長し、一つのものがいくつにも増えていく。よく考えてみれば、これも大きなちがいです。

聖書の中に、イエスの言葉として、「二粒ふたつぶの麦が、地におちて死ななければ、いつまでも一粒のままです。だが、死ねば、多くの実を結ぶでしょう」という一節が伝えられています。

イエスよりも、さらに七千年以上前のオリエントの人々にとって、この事実を認めるまでに、どのくらい、時間がかかり、どんな体験が重ねられたでしょうか。

種は、食べものです。石ですりつぶせば、食べられるのです。

それを、土の中に埋めてしまう。不安も多かったでしょう。誰かが掘り出して食べてしまうかもしれません。かりに芽を出しても、雨が降り続けば流される。降らなければ、枯かれてしまう。

^⑥農業のはじまったのは、オリエントでも、東アジアでも、山の中だったろう、と言われます。

いや、他の場所でも、勇敢ゆうかんに、この新しい生活方法ちようせんに挑戦した人がいたかもしれません。しかし原始農業がはじめからうまくいったはずはありません。^⑦なけなしの種を植えたのに、芽が出ない。せつかく途中とちゆうまで育ったのに、実らない。そんなことのくり返しだったでしょう。そんな時に死に絶えてしまった人もいたにちがいません。山の中、おそらく谷間のような場所ならば、農業が失敗しても、自然の食べもので生きのびることができます。木の実、小動物、魚などを、手に入れられるからです。

オリエント、中国とインドにまたがる山の中、アメリカ大陸中部、南部。おそらくいくつつかの地方で、人類は、新しい生活に足を踏ふみいれました。

そして、この生活革命、農業の波は、徐々に地球上にひろまっていきます。何千年もかかって、周辺の人々も、その暮らし方を変えていきます。

人間は、自然のままに生きるという生活に、別れをつげたのです。

(羽仁進^{はにすすむ}『羽仁進の世界歴史物語』より)

(注1) 狩猟^{しゅりやう}…山や野原の野生の動物をつかまえること。

(注2) 多様性^{たさうせい}…いろいろと種類の違^{ちが}ったものがあるという性質。

(注3) 挽臼^{ひきうす}…二つの円筒形^{えんとうけい}の石をかさね、そのあいだに穀物をいれ、上の石を回して粉にする道具。

(注4) オリエント…世界最古の文明が形成された西アジアを中心とした地域の呼び名。

問1 ——線部①「大きな悲劇」とありますが、具体的にどのようなことが「悲劇」のですか。五十字以内で説明しなさい。
ただし、句読点などの記号も字数にふくみません。

問2 ——線部②「人間の生活に大きな革命をひきおこす芽が、そのなかで育っていった」とありますが、その革命によってどのような生活に変わりましたか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. そのままでは食べられない実を加工して食べる生活。

イ. 種をまき、育てた植物を収穫しゅうかくする生活。

ウ. 野生に実っている植物を収穫する生活。

エ. 小動物をつかまえたり、貝を養殖ようしょくしたりして食べる生活。

問3 ——線部③「植物に頼って生きていく」について、人間が頼るのに適しているのはどんな植物ですか。その説明に当たる三十字以内の部分を探し、最初と最後の五字を答えなさい。ただし、句読点などの記号も字数にふくみません。

問4 — 線部④「当時の人々の遺体の多くは、やせていました」とありますが、それはなぜですか。その理由の説明として適切なものを次の中から二つ、選び、記号で答えなさい。

- ア. そのままでは食べられない植物があり、植物からだけでは必要な栄養が十分に得られなかったから。
- イ. 天候が大きく変わり、食べやすい木の実や果実をとることができなくなったから。
- ウ. 植物の種には糖分がふくまれており、それにより虫歯になる人が増えたから。
- エ. 人口が急に増えたため、限られた食料をめぐる争いが発生したから。
- オ. マンモスなどの大形獣おおがたじゅうがいなくなったため、肉がなかなか手に入りにくくなったから。
- カ. 植物の実や種を加工して食べても、消化できなかったから。

問5 — 線部⑤「相当な思いきりが必要だったでしょう」とありますが、筆者がそのように考えるのはなぜですか。その理由の説明としてふさわしくないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. せっかく植えた種が育たないという恐れおそがあるから。
- イ. 土に埋めた種は目に見えない地中で生長していくから。
- ウ. 食べものである種を土に埋めると、食べられなくなるから。
- エ. 種を土に埋めると、そのせいで土の栄養が失われるから。

問6 — 線部⑥ 「農業のはじまったのは、オリエントでも、東アジアでも、山の中だったろう、と言われます」とありますが、それはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 他の場所で挑戦^{ちようせん}しても条件がそろわず、芽が出ずに失敗してしまうから。
- イ. 他の場所と違^{ちが}って、山の中は植物の生育にむいている場所であるから。
- ウ. 山の中では植物が実らなくても自然の食べ物で命を保つことができるから。
- エ. 生活の方法を柔軟^{じゆうなん}に変えていこうという気持ちを、一番初めにもてたから。

問7 — 線部⑦ 「なけなしの」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. めずらしい
- イ. 高価な
- ウ. 見事な
- エ. ほんのわずかしかない

問8 A～Dの四人がこの文章を読んで議論をしています。本文の内容を適切に理解しているのはA～Dのどれですか。一人を選び、記号で答えなさい。

A. この文章を読んでわかったんだけど、食料にしていたマンモスがなくなっても、人間は生活の方法を変えながら生き残っていったんだね。昔から環境かんきょうの変化に適応しながら生きてきたんだ。

B. 環境の変化に適応するのはなかなか難しかったと思うな。だから山の中以外の地域で農業が失敗してしまったのは仕方がない。農業には忍耐にんたいが必要だと考える筆者の主張には賛成だな。

C. いくら忍耐力があっても、食べられる植物と食べられない植物を見分けるのは、筆者の言う通りとても難しいことだね。古代の人たちが見分けることよりも農業をすることを選んだのは正しい選択せんたくだったと思う。

D. 同感だ。私もこの文章を読んだことで、人間が自然の恵みをそのまま受け入れることができたおかげでいまの農業の成功があるんだと理解できたよ。人間はもう一度自然にかえっていく必要があると思う。

③ 奥田克久は中学の吹奏楽部に所属している。本文中にてくる「森勉（ベンちゃん）」は顧問の先生、「藤尾」「宗田」「有木」「町屋智宏」「川島」「ミンミン」「アズモ」「祥子」「マアさん」はその部員である。また、「久夫」「百合子」は克久の両親の名前である。「ティンパニ」「ユーフォonium」「スネア」などは楽器の名前である。次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

県民会館のステージのそでで藤尾が、ティンパニの音を合わせていた。そつと叩いたティンパニに計測器を近づけて音程を合わせるといふ仕事をしている時の藤尾の顔は澄んでいた。克久はこういふ時の藤尾さんの顔に憧れた。それは女の子に憧れるという気持ちとはぜんぜん違ふ。精密機械の精巧さに憧れるのに似ているのかもしれない。最近の宗田が、喜怒哀楽をあらわにする人間的な感情を嫌悪する気持ちになつていふのと、一脈、通じる感情かもしれない。

無秩序なものに秩序を与える人間が見せる慎重さは美しかった。たとえ、藤尾さんが男でも美しいだろう。男とか女とかは関係がない。

今朝の藤尾さんは違つていた。いつもの無口な藤尾さんではなかつた。搬出する楽器のリストを片手にたえず喋つていた。「あたし、大会の前の晩はいつも何かを忘れたつていふ夢を見るの。あ、しまったと思うんだけど、もう遅い。欠けたままやるつていふ夢を必ず見るんだ。でも、昨夜は、見なかつたの。初めてよ。夢を見なかつたなんて。だからね、絶対、何か忘れるものしそうな気がする、気をつけて」

楽器の搬出に残つた部員に言つていふのか、それとも自分に言い聞かせていふのか。こんなことを言いながら歩き回つていた。もちろん、藤尾と有木は別々にリストの入念なチェックをした。全ての楽器は間違いなく県民会館に運び込まれた。

今、ステージのそでにいるのは、いつもの藤尾よりもつと深い静謐をたたえた彼女だ。

藤尾が目上げた。克久と目が合う。それから藤尾の視線は克久の足もとに落ちた。

「奥田君、それ」

「えっ」

克久は自分の足もとを見て「あ」と言った。なんと上履うわばきを履はいているのである。持ち込む楽器のチェックは入念にしたが、誰も克久の靴くつまではチェックしなかった。

演奏会の時にだけ履く黒の短靴たんぐつは音楽室に置き忘れてきた。

「ま、靴で音を出すわけじゃないから」

「何？ 何かあったの」

克久の様子を見て、リハーサル室で音出しをすませ、舞台ぶたいのそでに入つて来た有木が藤尾に聞いた。藤尾の指さした克久の足もとを見て、「アハハハ」と大きな声で笑った。

「一つや二つ音はずしても、あわてるなよ。こいつなんか上履きなんだから」

有木がそう言うときクラリネットパートが全員笑った。舞台のそでには泣いている他の中学校の生徒もいた。きつと何か決定的な失敗をしたのだ。

「ほな、お師匠ししやうさん、行きまひよ」

このところ、関西弁で話すのがすっかり気に入った様子の町屋智弘が、川島をうながした。ユーフォニウムのミンミンが二人について行く。入学式から一度も洗っていない上履きでは、かなりかっこ悪いが、克久もステージに楽器を運び入れた。

「ステージに入ったら、君たちは演奏家なのだから、ちよろちよろ動くな。きよろきよろするな。どっしり構えろ」

森勉はいつもそう言っていた。そして、最後の位置の調整は、彼自身かれが素早く動き回って配慮はいりよした。ここが楽団員に拍手はくしちやうで迎えられるむか（注）マエストロと違うところだ。②うちのマエストロの動きの早さときたら、どんな小動物でもかなわない。

克久もスネアをもう少し左へ寄せると合図された。これで定位置である。トロンボーンのアズモが親指をたてて「いけるね」と合図してきた。アズモに答えたとたんに、会場が見えた。観客の一人、一人の顔が見分けられる。

お母さんは正面の二階席最前列にいた。「あそこにいたか」と克久がちらりと視線をやった。隣りは今朝まだ名古屋から戻っていないかったお父さんだ。久夫と百合子が並んでいるのは意外だった。それから、克久は何かを「あれ」と感じた。そのあれが何なのかは解らないが、二人が初めて並んで座っているのを見たような気がしたのだ。例えて言えば同級生が花の木公園でデートをしているのを目撃したような感じだった。両親はいつもより若々しかった。

それは一瞬の閃光だった。

曲名と学校名を紹介するアナウンスが会場に入った。指揮台わきに滑り込むようにたどりついた森勉が、実に素早く息を整えた。アナウンスが終わると同時に、ベンちゃんの息をきらしていた肩は、静かになった。指揮台上がった時には、数秒前まですばしっこく走り回っていたのがうそのようだ。有木と目が合う。指揮棒が振り上げられた。高く澄んだクラリネットの音が観客をしっかりとつかまえた。ティンパニが鳴り響く。

「(注3)交響的譚詩」は無難にこなした。祥子がマリンバの位置に移動する。ほんの数秒のことだ。会場はAを打ったようだ。再び指揮棒が振り上げられた。

ティンパニが静かに打ち鳴らされ、チューバなどの低音グループが最初の主題を奏で始めた。克久は真つ直ぐに立っている。立っているけれども、既に身体は音楽の中に吸い取られていた。何か、大きなものに包まれる感覚だった。

そこにあるものは、目に見えるものではなかった。が、克久は全身で、そこに確かにある偉大なものに(注4)参与していた。入るとか加わるとか、そういう平たい言葉では言い表せない。(注5)敬虔なものであった。感情というようになちっぽけなものではなくて、人間の知恵そのものの中に、自分が存在させられていた。それが参与ということだ。

低音グループが奏でた主題に木管が加わり、音の厚みが増す。やがてティンパニが(注6)クレシエンドで響いた。それを木

管楽器たちが優しく清らかな歌で迎えた時には、克久の胸の中にあの大きな夕陽があかあかと燃えた。いつも、そこで大きな夕陽が現れる。もちろん、克久はただ音楽に酔っていたわけではない。指揮棒はたえず、音加わるべき位置の指示を出していたし、拍は正確に数えられていた。部員だけに解る伝令が走り回っていた。それでも、あかあかとした夕陽は決して克久の目の中から消えなかった。夕陽の周囲に見慣れた団地の眺めがあり、それが斜めに射す陽の光を受けて、尊いものとして輝きを帯びた。克久は音の中にそういうものを見ていた。

曲は長い尾を引いた孔雀の優美な歩みや、青く光る首の動きを表しながら進んでいく。克久はホルンがタタタタン、タタタタンと、草原に吹く風の音を奏でる間にトライアングルをかまえた。ベンちゃんの眉毛が今だと告げる。克久が打ち鳴らすトライアングルの涼やかな音を聞き逃してしまう観客もいることだろう。しかし、それは決して欠くことができない重要な（注7）ディテールだ。

④ 一つの重要な仕事を終えた彼は、**B**な足取りで大太鼓の前に進んで行く。まったく彼の足取りは**B**としか言いようのないものだ。たとえ、その足が三カ月以上一度も洗ったことのない上履きをはいていたとしても、重要な儀礼に参与する（注8）司祭の**B**さを邪魔するものではなかった。

曲はクライマックスをめざし、正確に進行していた。少しも間違いがないとは言えない。小さなミスは、それぞれにすり傷、切り傷となつてしみ込んでいたが、痛みを訴える暇はなかった。今、ここだという指示が指揮棒の先から飛んだその瞬間に、克久は大太鼓を一発、十分に抑制して打ち込んだ。もう一発、重要な部分がある。その指示は指揮棒からはこない。ベンちゃんの眉毛がここぞとその打ち込むべき位置を教えた。克久の一発に続いて、マアさんがシンバルを華やかに響かせた。孔雀がその羽を震わせながら開く時の光そのものが、マアさんのシンバルの音だった。すかさず金管が高らかに孔雀の羽の輝きを繰り広げる。

金管が華やかに孔雀の大きく広げられた羽そのものを表現した中へ、あの夕暮れの風のようなホルンが通り過ぎていき、テ

インパニが最後を力強く締めくくった。次の瞬間、すべての音は完全に消え失せると同時に、威勢をほこった孔雀の姿も消えた。

四十七人の部員と一人の指揮者がいる。

拍手が湧き起こるより先に、四十七人の部員は、ただの中学生に戻る。

克久は中学校を卒業するまでの間に何度となくこの不思議な瞬間を経験することになるが、最初に経験したのはこの時だった。

夢から覚めるというようなあいまいなものではなかった。この世界には敬虔に参与すべき何かがあることが明快に身体で解る場所がそこにあった。そこから大事なものは隠されてしまっている場所へ戻ったということだ。大事なものは隠されてはいるが、克久はその痕跡をしっかりと握っていた。

(中沢けい『楽隊のうさぎ』)

(注1) 静謐：静かでおだやかな様子。

(注2) マエストロ：芸術分野で特に優れている人物に対して使われる言葉で、ここでは指揮者のこと。

(注3) 交響的譚詩：曲のタイトル。

(注4) 参与：物事に関わり合うこと。

(注5) 敬虔：深く敬って態度をつつしむさま。

(注6) クレシェンド：「だんだん強く」を表す音楽用語。

(注7) デイテール：全体に対する細かい部分。細部。

(注8) 司祭：教会で儀式をおこなう役目の人物。

問1 ——線部①「克久はこういう時の藤尾さんの顔に憧れた」とありますが、克久が憧れるのはなぜだと考えられますか。
その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. すぐれた演奏をするために人間であるより精密機械であろうと努力する藤尾さんの音楽に対する情熱に心を打たれたから。

イ. 慎重にティンパニの音程を合わせている藤尾さんの表情に、人間の喜怒哀楽に惑わされない真剣さが感じられたから。

ウ. まるで精密機械のように冷たく見える藤尾さんの心の中に、実は仲間たちを思いやる一面もあることが分かり、親しみを感じはじめたから。

エ. ティンパニの音に秩序を与えるというむずかしい仕事をやり終えた藤尾さんの表情がとてもすがすがしかったから。

問2 ——線部②「うちのマエストロの動きの早さときたら、どんな小動物でもかなわない」とあります。この感想は克久が思ったことですが、ここから読みとれる吹奏楽部員の森勉への思いの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 必要以上の細かい指示にとまどいながらも、堂々とした態度でいるので尊敬している。

イ. 親切になんでも教えてくれるところに感謝しつつも、落ち着きのないところがあるので少し見くびっている。

ウ. 舞台上での行き届いた正確な指示に感心するとともに、えらそうにしないので親しみも感じている。

エ. 反論をゆるさない厳格さがおそろしくはあるが、まわりから認めてもらえていないので少し同情もしている。

問3 ―線部③「観客の一人、一人の顔が見分けられる」とありますが、ここから、演奏前の克久のどのような様子が読みとれますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 上履^{うわば}きを忘れるぐらいの失敗を気にすることもなく、演奏の準備を問題なく終えて、落ち着いて集中できている様子。
イ. 上履きを忘れたという失敗によって気持ちが動転し、心を落ち着けるため、観客席に両親の姿を探そうとあせっている様子。

ウ. 演奏の準備が全て終わったとたんに、これから行われる演奏のことより観客席の方が気になりはじめ、気持ちのゆとりがなくなっている様子。

エ. これから演奏を始めるにあたって、両親は来ていないだろうと思いつつも、期待を込めて観客席を見ずにはいられないでいる様子。

問4 空らん A について、この空らんにあてはまる語としても最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 鳥 イ. 水 ウ. 石 エ. 天

問5 空らん B について、この三か所の空らんには共通の語があてはまります。その言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 奇妙^{きみょう} イ. かるやか ウ. おおげさ エ. おごそか オ. 不安定

問6 ——線部④「二つの重要な仕事」とありますが、具体的にどのようなことが「仕事」なのですか。三十五字以内で説明しなさい。ただし、句読点などの記号も字数にふくみます。

問7 ——線部⑤「この不思議な瞬間しゅんかん」とありますが、どのようなことが不思議なのですか。五十字以内で説明しなさい。ただし、句読点などの記号も字数にふくみます。

(おわり)

国語解答用紙

教室番号

座席番号

受験番号

氏名

(注意) ※のらんには何も書かないこと

一

⑨	⑤	①
⑩	⑥	②
⑦	③	
⑧	④	
める		

二

問 1
50

問 2
問 3
最初
}
最後

問 4
問 5
問 6

問 7
問 8

三

問 1
問 2
問 3

問 4
問 5

問 6
35

問 7
50

※

※

※

※

※

※

※
